



Socio express

エクスプレス

巻頭言	被災地の中学生に学ぶ／山崎憲治	2
社会科教育法	「動態地誌」に中学地理の活路を見出そう／深見 聡	4
授業実践レポート	東北地方の学習における「生活・文化を中心とした考察」の実践／岩手県中学校教員	6
	言語活動の充実を図りながら地域をとらえる／佐藤貴裕	8

教育出版

被災地の中学生に学ぶ

山崎 憲治



●やまざき けんじ／岩手大学教授

被災地に学ぶことは多くあります。4月25日、岩手県宮古市立田老第一中学校の入学式に参列する機会を得ました。岩手大学では昨年、集中講座「津波の実際から防災を考える」を、この中学校を会場に実施しています。中学生と大学生がコラボレートした授業展開が試みられました。震災後は大学で集めた学用品を分類し、4月25日の入学式までに全生徒に配給しました。これらが縁となり、入学式へ参列することになったのです。

この入学式で、生徒会長による新入生歓迎あいさつに感銘を受けました。「…震災の日から普通のことが普通でなくなり、普通でないことが日常の一部になっていたりしています。田老の街並みは消え、がれきの山になった町。しかし少しずつもとに戻りつつあります。それはいつまでも人の力です。…わたしたちは津波のことを忘れてはいけなく、津波のことを引きずってもいけません。…校歌の三番には、わたしたちの進むべき方向が示されています。『防浪堤を仰ぎみよ 試練の津波 幾たびぞ 乗り越えたてし わが郷土 父祖の偉業や跡つがん』…がんばれ田老！がんばれ一中！」。

最後の言葉の後、在校生はいっせいに「オー」と応え、在校生との一体感を受け取ることができました。新入生の半数はジャージ姿の入学式です。

郷土である田老と母校に対する誇りと自信を示したあいさつでした。これは何に起因するのでしょうか。生徒たちは震災で大きく成長しました。3月11日午後2時46分、地震が発生。ゆれが収まると、生徒・教職員の全員が校庭に避難します。次の指示がなかなか出ません。「津波だ！」という声に、全員が校舎裏の高台に向かい「てんでんこ」に走り始めます。しかし、校庭には別の団が避難していました。田老保育園の園児30名余りです。生徒たちは、この園児の手を引いたり抱きかかえたりして走ります。がれきを伴った真っ黒い津波が迫ってきます。校舎裏の崖には道はありません。当日はみぞれが降っていて滑りやすい状態です。早く登らねば津波に巻き込まれる。生徒たちはバケツリレー方式で園児を高台に上げています。まさに危機一髪でした。振り返ると中学校の校庭はがれきに埋め尽くされていました。津波に襲われたら懸命になって高台に逃げることに、同時に少しの体力と時間があれば弱者を助けること。これを実践しています。その後、家の整理やがれき撤去でも生徒たちは率先して働きます。高齢化の進む田老地区において、中学生はがれきの撤去などを行い、労働の担い手に成長していきます。地域の人々への支援と労働は地域への愛着を高め、復興の「のろし」を上げることに繋がっていきます。

田老地区は最高レベルの防浪堤(防潮堤)と避難路をもつ町です。防浪堤は高さ10m、総延長2,400mほどの巨大なもので、しかも二重の構造になっています。居住域から見ると内側の堤防は弓形に湾曲し、津波の力を二方向に分散させるコンセプトで建設されています。外側は海に向かって広くV字型に展開し、力づくで津波を抑え込もうとしています。

内側の防浪堤は、1933年に発生した昭和三陸大津波の翌年から建設を始め、1958年に竣工しました。堤防建設は、当時の田老町独自の事業として展開しています。県や国はなぜ補助をしなかったのでしょうか。田老地区は、1896年に発生した明治三陸大津波でも壊滅的な被害を受けています。1929年には世界恐慌が発生、1931年は東北を凶作が襲います。1933年には大津波。さらに翌年にも凶作に見舞われます。困難な時代状況のなか、県は満蒙開拓団に参加して田老町から移転するよう勧めます。満蒙開拓団の募集には県ごとの目標数値が設定され、また他県との競争もあり、田老町もその集団移転の候補にされたのです。しかし、田老町はこの国策を拒否し、独自に堤防建設を始めます。同時に居住地区の区画整理を行い、避難路の確保を実現します。それは「リアスの海」の豊かさがあつたからだと思われます。津波被害を拡大させる要因ともなるリアス海岸は、海の豊かさをもたらす好条件でもあります。背後の山から入り江に川が流れ込み汽水域が生まれます。ここは外洋と比べて、プランクトンの量が格段に多い水域を形成します。この豊かさの可能性が、復興の具体策をかたちづくっていくと

思われます。

外側の防浪堤は1962年から建設が始まり、1966年に竣工しています。今回の津波により、外側の防浪堤東側が破壊されました。しかしこの防浪堤によって、津波の侵入時間を5分から6分間程度遅らせる効果がありました。生徒たちが保育園児を崖の上に避難させる時間を確保したのです。

構造物に頼る対策には限界があります。田老地区の漁港を見下ろす丘の中腹に、白いワゴン車が流れ着いていました。明治三陸大津波のマーカーをはるかに越える高さです。その場所の上部に位置する崖には、津波によって打ち上げられたアワビの貝殻が付着しています。この高さまで構造物を積み上げることは不可能でしょう。構造物のみに依存しない避難体制づくりが必要です。津波より高いところに短時間で上がるルートを確保することにより、人的被害を無くすことは可能です。

復興には時間を必要とします。中学生が20歳代、30歳代になるまでかかるかもしれません。生徒会長のあいさつは、人々の連帯した力を強調しました。世代を超えた復興の力が求められるとともに、弱い立場の人々を踏み台にし次の世代に負担を先送りするような開発のあり方が問われています。災害は地域が抱える課題を一気に表出させ、矛盾は長期に渡って拡大していきます。豊かな海の資源を持続可能な開発方法で利用する。海を畏怖しながら何世代にも渡って豊かさを享受できるしくみをつくること、このような復興が求められています。冒頭でふれた入学式のあいさつに、復興の可能性を発見でき感激しました。

「動態地誌」に中学地理の活路を見出そう

深見 聡



●ふかみ さとし／長崎大学大学院准教授

● 1. はじめに一大転換を迎えた地理的分野

新学習指導要領は、中学社会科地理的分野の内容に大きな転換点を打ち出した。筆者はとくに「動態地誌的な学習による国土認識の充実」について注目している。ここでいう「動態地誌」とは、項目ごとの羅列的な暗記にとどまりがちであった地理学習へのアンチテーゼとしてとらえられよう。実際には自然環境・人間環境にかかわらず地域のすがたは日々変貌をとげており、地域にみられる事象を「社会参画」の視点まで踏まえ、新聞や情報通信の積極的な活用を重視する試みは、本来地理が備えている有用性を発揮する追い風になると考えている。

そこで本稿では、前回の学習指導要領から大幅な変更が示された「日本の諸地域」の内容に注目し、この単元を少しでも魅力あるものにしていくには、どのような工夫が可能か考えてみることにしたい。

● 2. 指導要領に示された7つの考察ポイント

日本の諸地域については、日本をいくつかの地域に区分したうえで、それぞれに7つの考察に基づいて地域的特色をとらえさせることとされている。以下、その考察の仕方に沿って筆者の考えを述べてみよう。

(ア)自然環境を中核とした考察

社会科三分野のなかで、地理がもっとも特徴的なのは、自然環境と社会環境とのかかわりを主題としてとらえる点にある。しかし、自然地

理的内容と人文地理的内容の関連性を授業で展開するのは決して容易ではない。これは地理に課された永遠の課題ともいえるが、地理は空間的に社会認識を深める分野である。この点に立脚すれば、両者が相互に関係していることを学ぶ態度の伸張を図る努力を、教師は追求し続けるべきである。「日本の諸地域」単元では、気候の変化や生物の多様性、変動帯に位置することでみられる変化に富んだ地質、それらが形づくる景勝地などの地形といった自然環境のもとに、いかに日本に暮らす人びとが共生してきたのかに注目して扱う必要があるだろう。現代の地理学では、人間の活動の幅をある程度は規定するものの、自然環境は可能性を与える存在にすぎないとする環境可能論が主流であるが、この「ある程度」とは地域や時代によって変化するものである。このような内容を意識しつつ、地域の諸事象をとらえていくことが必要である。

(イ)歴史的背景を中核とした考察

古写真・古地図・絵図や映像といった、地域の変遷が読み取れる視覚教材の提示が有効である。

また、歴史的分野ですでに習った内容を中心に、地理的分野でも今日の地域的特色がみられる背景には先人の残した足跡(歴史)が反映されていることに触れるべきである。歴史的分野で日本史を扱う際には、時代の古い順に全国の主要なできごとを網羅していく方式が採られている。一方、地理における「日本の諸地域」単

元では、特定の地域に着目して時間軸の重なりをできるだけ可視化して提示することで、今日みられる地域の歴史的背景の理解の一助としてほしい。

(ウ)産業を中核とした考察

いわゆる「太平洋ベルト」に位置する工業地帯・地域の学習が、どうしても多くなると思われる。一方で、近代化産業遺産や伝統産業など地域に根ざした(根づいていた)ものにも注目してほしい。例えば、産業としての農畜産業には、食の安心・安全への高い関心が向けられており、社会参画への動機づけとなるような調べ学習に多くの時間を割くことは、社会的な喫緊の要請ともいえる。それに応えるには、単に産品の種類や生産高の比較にとどまらず、地域により産品のちがいがみられる自然的条件(気候・土壌・地形など)ならびに社会的条件(労働形態・大消費地との距離など)に基づく考察にまで深化させる点が欠かせず、まさしく地域的特色を動的にとらえることになる。

(エ)環境問題や環境保全を中核とした考察

「持続可能な地域社会」を形成していくには、身近な環境問題解決の取り組みが重要である。とくに、環境問題は複合的要因が複雑に絡み合い顕在化している。地域の課題としてみられる環境問題や環境保全に対して地域に根ざしているNGOやNPOの活動などは、身近な地域を調べる対象として位置づけることができる。

(オ)人口や都市・村落を中核とした考察

人口減少社会を迎え、多くの地域が過疎化の進行に直面している。それにともない、地域コミュニティの維持が困難になるケースも増加している。また、定住人口から交流人口の増加へ

といった発想の転換が自治体の施策のなかにも示されるようになった。これらの最新の動向を調べ、人口の増減を表面的にとらえるのではなく、なぜ過疎といった条件不利地域にも住み続ける人びとがいるのか議論を深めてみると、地域の課題をとらえる一助になるといえる。

(カ)生活・文化を中核とした考察

生徒は地域の生活者の一人であることを考えれば、この視点は身近な生活圏と他地域とのケースを比較する際に有効なものといえよう。生活環境の変化(過疎・過密やインフラ整備など)が有形無形の文化にどのような変化をもたらしているか、その消長の意味を考えることも重要である。

(キ)他地域との結びつきを中核とした考察

(ア)～(カ)に示されたものは、いずれも地域単独ではなく、周辺地域あるいはその他の地域や外国に関連しつつ存在するものである。そのことを象徴的に表す地域的特色を、さまざまな媒体をとおして把握することで、相互理解による社会認識という公民的資質が醸成されるといえる。

●3. おわりに

長年指摘されていることだが、社会科三分野のなかで地理はもっとも扱いにくいという現場の声も少なくない。歴史・公民の二分野に比べて、地理は空間的認識をとくに必要とするし、自然環境も含めた広範囲の内容を含むからである。それに対し、動態地誌の考え方は、地理にありがちだった羅列的内容の連続という印象を大きく変える可能性を有しており、さらに注目していきたい。

東北地方の学習における「生活・文化を中心とした考察」の実践 ～日本の伝統や文化を尊重する態度の育成を目ざして

●岩手県中学校教員

●1. はじめに

本実践は、平成24年度から全面実施となる中学校学習指導要領の主な改善事項である日本の伝統や文化を尊重する態度を育成するために、地理的分野における「生活・文化を中心とした考察」を東北地方の学習にあてはめた実践である。そのための指導の方向性として、まず、地域に伝わる伝統と文化に興味や関心をもち、住んでいる地域に誇りや愛着をもてる態度を育てることに授業の主眼を置いた。生徒にとって「住んでいる地域に誇りや愛着をもてる」条件は、やはり「地域のよさ」を認識することであろう。今回は地域の伝統行事「チャグチャグ馬コ」を取り上げることで地域を再認識し、地域を見直す気持ちを大切にしたいと考え学習を行った。

●2. 具体的実践

(1)課題の設定

「チャグチャグ馬コ」とは岩手県滝沢村で毎年6月に行われる伝統行事で、100頭ほどの馬があでやかな飾り付けを行い、隣の盛岡市まで15kmの道のりを行進する祭りで、馬につけたたくさんの鈴がチャグチャグと鳴るところからこの名が付いたといわれている。馬の飾りは、かつての大名行列の「小荷駄装束」に端を発す



るといわれるが、農作業に欠かせない馬をいたわる愛情の表れでもある。学区内には、南部曲家とよばれる伝統的な住居も残っており、馬と

人とは古くから生活を共にしてきた。

しかしながら、農作業で大型トラクターの導入など機械化が進んだことで、農耕馬の使用は見られなくなり、飼育されている頭数も減少し、馬と人の関わる機会も少なくなっている。本校の学区も村役場の周辺にニュータウンが建設されるなど都市化の影響を受けており、日常で生徒が馬を目にする機会もほとんどないのが実情である。

祭りに対するイメージも「子どもの時に、馬コの上に乗ったことがある」という生徒はいるものの、「馬の行進」「子どものための祭り」とか「観光客誘致のための祭り」といった、祭りの一面しかとらえていない生徒も多い。地域の生活から生まれた伝統文化でありながら、生徒には観光の面だけがクローズアップされて受け取られているという危惧があった。

そこで、地域の伝統や文化を見直し、守り育てる心を育てるなかで、地域の特色をとらえさせる学習を展開するために、次のような課題を設定した。

学習課題

地域の伝統行事「チャグチャグ馬コ」が、今も多くの人々をひきつけるのはなぜだろう。

生徒にとって、「馬の行進」にしか見えない行事が、なぜ「今」も、全国の多くの人々をひきつけるのか。学習課題を追究するなかで、日常見慣れている滝沢村の水田や岩手山の風景が織りなす景観も、「チャグチャグ馬コ」の大きな魅力であることに気づかせ、地域を見直す気持ちを育むこともねらいとし、授業展開を行った。

(2)課題の追究・考察

①第1次「東北地方や滝沢村の特色について考える」(2時間)

(ア)滝沢村の代表的な伝統行事「チャグチャグ馬コ」や他地域の伝統行事の観光写真を見て、どのようなものか発表する。
・東北地方の主な伝統行事を理解する。
(イ)伝統行事が盛んになった理由を、自然環境や歴史的背景から考える。
・自然環境→多雪地帯が多く、夏が短い。
・冷害を克服し、農業が盛んに。
・豊作や無病息災を願う気持ちが、祭りへ結びついていったことを理解する。

②第2次「滝沢村の伝統行事の保存について考える」(2時間)

(ア)滝沢村の農業の機械化と都市化について知る。
・トラクターなどの大型機械の導入とニュータウン建設などの都市化の現状
(イ)「無形民俗文化財」指定の意味や、祭りに訪れる人々の思いをつかむ。
・無形民俗文化財とは何か
・観光客からのアンケート結果
(ウ)保存会の人々など、馬を飼っている人たちの苦労や思いをつかむ。
・学区内の保存会の方へのインタビュー



「馬コ」の本来の農耕馬の姿を見てもらうために、代かき作業を公開しています。馬と「南部曲家」で暮らしているのは、

この地域ではわたしの1軒だけになってしまいました。伝統を、どう伝えていくかが課題です。

(エ)「チャグチャグ馬コ」をとりまく、さまざまな課題を知り、「それでも多くの人々をひきつけるのはなぜだろう」という課題について討論する。
・観光客数の推移グラフ→年々増加

「馬コ」行列の写真の背景を、「マンションなどのビル群」に加工した写真を生徒に提示し、印象がどのように変わって見えるか意見を交換させる。

・「水田や岩手山」が見える景観も大きな魅力

なのではないか。

・農村の景観を守っていくことも大切なのではないか。

③第3次「伝統行事を無理なく伝えていくためにどのような方法があるのか考える」(2時間)

(ア)福島県の「相馬野馬追」のように、他地域で馬を使った伝統行事がどのように保存されているのかを調べる。
(イ)伝統行事を守っていくための方法を考え、交流し合う。
(ウ)意見交流の結果を踏まえ、自分の考えをまとめる。

●3. おわりに

実践を終え、地域の伝統や文化の学習には、ほとんどの生徒が興味・関心を示し、地域の伝統行事「チャグチャグ馬コ」が、生活を背景にした行事であったことを知ると、多くの生徒が住んでいる地域に対して見直した感想を寄せている。「自分たちの地域の伝統行事を大切にしていきたいと思った」等の感想から、住んでいる地域に誇りや愛着がもてる方向で学習を行ったことにより、伝統や文化を尊重する態度を育成することができたのではないかと考える。また今回の実践では、「チャグチャグ馬コ」の魅力の一つでもある「農村の景観」の保存という視点にも気づかせることができたことも大きな成果であった。

それぞれの地域には、それぞれの生活から育まれた伝統や文化がある。それぞれの学校で地域の歴史や伝統・文化に関わる事物を発掘し、少しずつ教材化を進めるなかでそれを学校の財産とし、伝統や文化を意識した地域教材を扱った授業を実施していくことが望まれているのではないだろうか。

言語活動の充実を図りながら地域をとらえる ～カードづくりの取り組み(「日本の諸地域」東北地方)から

佐藤 貴裕



●さとう たかひろ／愛知県刈谷市立刈谷東中学校教諭

●1. はじめに

来年度から施行される学習指導要領では、言語活動の充実を図ることが求められている。地理的分野では、今までの事例学習から動態地誌に基づいた学習への転換が図られている。本稿は、新学習指導要領を意識して、生徒が意欲的に授業へ参加することができるように取り組んだ、「日本の諸地域」東北地方での事例を紹介する。

●2. 授業実践の様子

(1)「日本の諸地域」単元の全体構想(全35時間)

日本の諸地域の指導については、以下のような点を中核にして指導を進めていった。指導の順序についても、以下の順番ですすめた。

- a. 九州地方(環境問題や環境保全を中核)5時間…水俣病や北九州工業地域を事例に。
- b. 中国・四国地方(人口や都市・村落を中核)5時間…広島県の人口を事例に。
- c. 近畿地方(歴史的背景を中核)5時間…京都府と奈良県の世界遺産を事例に。
- d. 中部地方(産業を中核)5時間…農業・工業・伝統産業などを事例に。
- e. 関東地方(他の地域との結びつきを中核)5時間…交通・通信の中心として東京都を事例に。
- f. 東北地方(生活・文化を中核)5時間…「東北四大祭り」を事例に。
- g. 北海道地方(自然環境を中核)5時間…寒い自然環境を生かした人々の生活を事例に。

(2)東北地方の授業構想(全5時間)

本単元は「祭りを題材に伝統的な文化を知る」と題して、東北地方をとらえる学習を展開した。以下のような授業構想をもとに実践に取り組んだ。

第1時 東北地方は、どんなところかイメージしよう

- ・地図を使って東北地方の概要をとらえる。
- ・東北地方のイメージと、事象とを関連づける。

第2時 東北地方の基本的な事柄を知ろう

- ・主な自然地名をはじめ、世界遺産や伝統工芸、祭りを中心にワークシートで整理する。

第3時 東北地方の様子について調べよう

- ・東北地方の文化などについて調べ、はがきサイズのカードにイラストと200字程度の文章でまとめる。

第4・5時 カードの交流会を行い、東北地方をまとめよう

- ・カードをもとに交流活動を行う。
- ・東北地方のイメージについてまとめる。

(3)実践の様子

第1・2時間目の授業のあと、知識を活用した表現活動として「カードづくり」を行った。表面には、その県を代表する日本で有数のできごとや産物などをイラストで表現させ、裏面には表面に関する解説を200字程度で記述させた。右のカードは、秋田県の「秋田竿燈まつり」について文字を最小限に減らしてまとめた作品例である。

【秋田県の裏面の内容】

秋田県の代表的なものは、有名な「竿燈まつり」です。195億円の収入が得られています。青森のねぶた・仙台の七夕・山形の花笠と合わせて東北四大祭りといえます。竿燈は大きいもので高さ12m、提灯の高さ64cm、提灯の数46個、重さ50kgといわれています。竿燈の起源は、「眠り流し」で眠気を払うための儀式といわれていて、よい作物が実るようにとの願いが込められた伝統行事として始まり、七夕・お盆の祭りが合体してできたものとされます。



そして、生徒が作成

したカードは教師が分類した。生徒が調べたもののなかで、クラス全員に共有させるべき内容や、数の多少に応じて点数を付けた。例えば、「竿燈まつり」を調べたものは、学年全体の240人のうち2人だけと少数であったため、10点満点中9点の高得点を与えた。一方で、多くの生徒が調べてきた「あきたこまち」や「田沢湖(日本最深の湖)」などには、10点満点中1点として差をつけた。

カードの交流活動では、4人のグループごとにバトル形式(数字の大きい方がカードを獲得するなどルールを決めて交換する)などの方法を取り入れて進めた。また、優れた作品について全体の前で発表する場面を設けて、プレゼンテーション能力を高めることもできた。このような方法で生徒どうしを交流させることで、作品内容の共有化を図った。この交換活動後、自主的に東北地方の新しい情報を入手し、楽しみながら認識を深めたり広げたりすることができるようになった。その後、東北地方のイメージ

をまとめる活動を行った。ある生徒は、400字程度の文章にまとめた。東北地方の略地図を書き入れ、そこに奥羽山脈や北上川、最上川などの自然地名を記入した生徒もみられた。カード交換で得た情報をもとに、山形県のさくらんぼ、青森県のりんごなどをイラストマップ風にまとめる生徒もいた。

【東北地方のまとめ】

- ・自分は、東北地方と聞いても「ただ、寒い地方」ということぐらいしか思いつきませんでした。イメージを出し合うときでも、「なまはげ」「かまくら」「東北新幹線」などと聞いて、少ししかイメージできませんでした。
- ・今回、「竿燈まつり」「青森のねぶた」「仙台の七夕」「山形の花笠」について調べて、この祭りで東北地方に人が集まっているんだということを感じました。
- ・私は、「秋田の竿燈まつり」をカードにしましたが、友達と交換しているうちに、世界遺産の白神山地が出てきたり、歴史で習った「中尊寺金色堂」がでてきたりするなど、注目すべきものはたくさんあるんだなあと感じました。
- ・カードの交換をする活動を通して、いろいろな県の特徴を知ることができ、何が生産量の一位だとか、自分の書いたもの以外にもたくさんあるということがわかりました。

●3. 終わりに

本稿では、東北地方を取り上げて説明したが、「世界の諸地域」・「日本の諸地域」ともに同様の流れで実践に取り組んだ。そして、すべての地域を学習した後、世界版・日本版・テーマ版の各カードを使って交流活動を実施した。また、授業の最初に位置づけることで生徒は意欲をもって参加でき、基本的な国名や県名、都市名、学習事項などを習得することができた。来年から全面実施される学習指導要領に向けて、それぞれの地域について何を中核にして指導を進めていくのか、今後も教材研究をすすめていきたい。



教育現場とリンク

教育出版

エデュコネット

入会金・会費は無料です!



EducoNet の会員を募集しています!

会員の皆様に、インターネットを通じて
教育情報をご提供します。



教育関係者専用 のWEBサイトです。

役立つ資料・情報の宝庫 です。

- 教育情報……教育界の動向等の情報提供
- 教科のページ……年間指導計画・評価基準・高校シラバス・教科別お役立ちコーナー・編集部からのお知らせなど
- メールマガジン……教育関連情報をタイムリーに発信

会員は…

- ◆会員専用のコンテンツにアクセスできます。
- ◆メールマガジンが定期的に配信されます。

申し込みを受け付け後、ID・パスワードを勤務先に郵送します。

教育出版EducoNet会員登録について

★WEBにて受け付けています!!

教育出版ホームページまたは
<http://educonet.jp/entry.html>に
アクセスしてください。

※個人会員のほかに、教育委員会・学校単位での申し込みも受け付けます。

教育出版ホームページの主な内容
<http://www.kyoiku-shuppan.co.jp/>

EducoNet (会員制)

- ・年間指導計画
- ・評価基準
- ・教科別お役立ちコーナー
- ・教科通信
- ・ニュースレター
- ・各種教育情報
- ・編集部から
- ・メールマガジン

■ 情報提供

…教育情報 ・総合的な学習 ・研究会日程

■ 各種リンク集

■ ご案内

…教科書内容 ・教師用指導書 ・教材品

■ 教科書関連資料・写真館

■ 新刊書紹介

■ もの知りテーマパーク

■ 地球時代の教育情報誌 Educo

教育出版

▶▶ EducoNet事務局 E-mail: educonet@kyoiku-shuppan.co.jp

【表紙写真】「パリの歴史軸」と呼ばれる直線配置された建築物群の一つ、チュイルリー公園にて寛ぐ人々。写真奥にはカラーゼル凱旋門が見える(上写真)。公園には白い砂が敷かれ、多くのオブジェが点在するなど、写真右のルーブル美術館と一体的に整備されている(下写真)。(2010年 フランス・パリ)

中学社会通信 Socio express (2011年 秋号)

2011年9月30日 発行

編集:教育出版株式会社編集局
印刷:大日本印刷株式会社

発行:教育出版株式会社 代表者:小林一光
発行所:教育出版株式会社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-10 電話 03-3238-6864(お問い合わせ)
URL <http://www.kyoiku-shuppan.co.jp>



なかよし宣言

わたしたちをとりまく自然や社会は、科学技術の進展や国際化、情報化、高齢化などによって、今、大きく変わろうとしています。このような社会の変化の中で、人間や地球上のあらゆる命がのびのびと生きていくためには、人や自然を大切にしながら、共に生きていこうとする優しく大きな心をもつことが求められています。

わたしたちは、この理念を「地球となかよし」というコンセプトワードに込め、社会のさまざまな場面で人間の成長に貢献していきます。

北海道支社	〒060-0003 札幌市中央区北3条西3-1-44 ヒューリック札幌ビル 6F TEL: 011-231-3445 FAX: 011-231-3509
函館営業所	〒040-0011 函館市本町6-7 函館第一生命ビルディング 3F TEL: 0138-51-0886 FAX: 0138-31-0198
東北支社	〒980-0014 仙台市青葉区本町1-14-18 ライオンズプラザ本町ビル 7F TEL: 022-227-0391 FAX: 022-227-0395
中部支社	〒460-0011 名古屋市中区大須4-10-40 カジウラテックスビル 5F TEL: 052-262-0821 FAX: 052-262-0825
関西支社	〒541-0056 大阪市中央区久太郎町1-6-27 ヨシカワビル 7F TEL: 06-6261-9221 FAX: 06-6261-9401
中国支社	〒730-0051 広島市中区大手町3-7-2 あいおいニッセイ同和損保広島大手町ビル 5F TEL: 082-249-6033 FAX: 082-249-6040
四国支社	〒790-0004 松山市大街道3-6-1 岡崎産業ビル 5F TEL: 089-943-7193 FAX: 089-943-7134
九州支社	〒810-0001 福岡市中央区天神2-8-49 ヒューリック福岡ビル 8F TEL: 092-781-2861 FAX: 092-781-2863
沖縄営業所	〒901-0155 那覇市金城3-8-9 一粒ビル 3F TEL: 098-859-1411 FAX: 098-859-1411